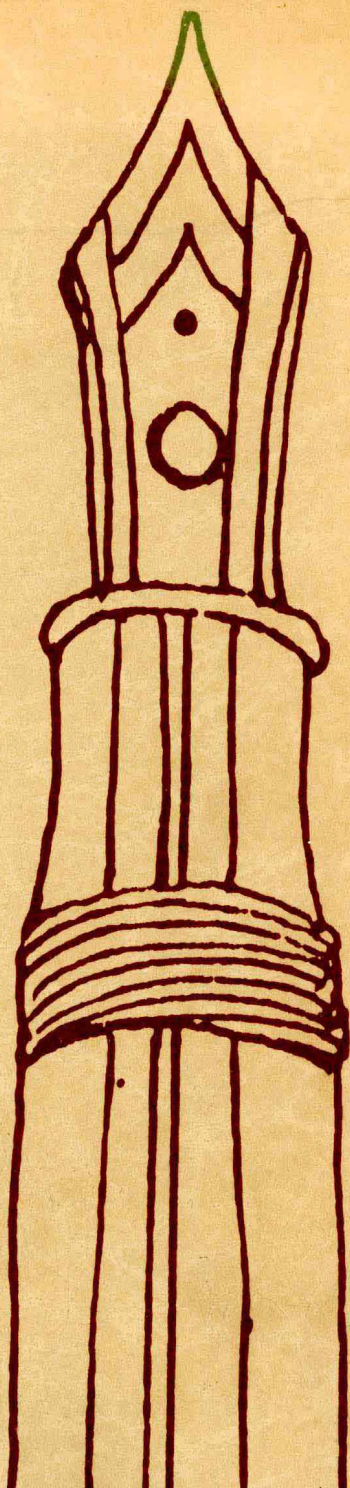


近代文学の
知識人
像

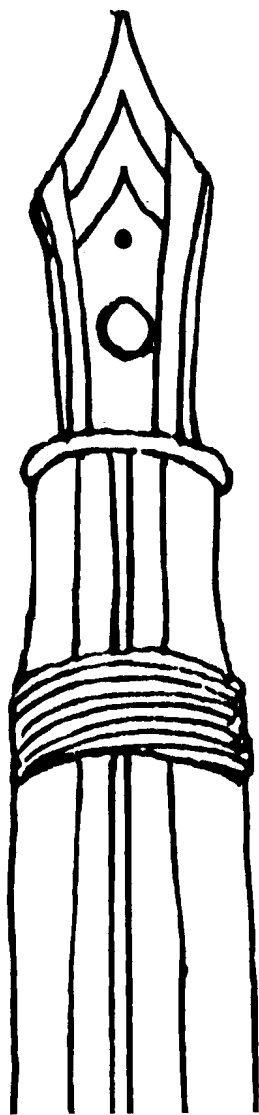
和田繁二郎編著

ミネルヴァ書房



和田繁二郎編著

ミネルヴァ書房



近代文学の知識人像

1985年5月20日 第1版第1刷発行

〈検印廃止〉

定価はカバーに
表示しています

編著者 和田 繁 二 郎

発行者 杉 田 信 夫

印刷者 江 戸 卯 一 郎

発行所 株式
会社 ミネルヴァ書房

607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電話 (075)-(581)-5191 番(代表)
振替口座 (京 都) 2-8076 番

© 和田繁二郎, 1985

共同印刷工業・新生製本

ISBN4-623-01602-1

Printed in Japan

執筆者紹介 (執筆順)

和田繁二郎 (わだ・しげじろう)

1913年 生まれ
1943年 立命館大学文学部卒業
現在 大谷女子大学教授
立命館大学名誉教授, 文学博士(立
命館大学)
担当 編者, 第一章

深江 浩 (ふかえ・ひろし)

1926年 生まれ
1950年 京都大学文学部卒業
現在 京都薬科大学教授
担当 第六章

山崎 国紀 (やまさき・くにのり)

1933年 生まれ
1965年 立命館大学大学院文学研究科
修士課程修了
現在 花園大学教授
担当 第二章

芦谷 信和 (あしや・のぶかず)

1929年 生まれ
1958年 立命館大学大学院文学研究科
修士課程修了
現在 立命館大学教授
担当 第七章

澤 正宏 (さわ・まさひろ)

1946年 生まれ
1979年 立命館大学大学院文学研究科
博士課程単位取得
現在 花園大学助教授
担当 第三章

国末 泰平 (くにすえ・やすひら)

1939年 生まれ
1968年 立命館大学大学院文学研究科
修士課程修了
現在 立命館大学非常勤講師
担当 第八章

北野 昭彦 (きたの・あきひこ)

1935年 生まれ
1962年 立命館大学大学院文学研究科
修士課程修了
現在 大谷女子大学助教授
担当 第四章

平田 利晴 (ひらた・としはる)

1944年 生まれ
1969年 立命館大学大学院文学研究科
修士課程修了
現在 園田学園女子大学助教授
担当 第九章

上田 博 (うへだ・ひろし)

1940年 生まれ
1977年 立命館大学大学院文学研究科
博士課程単位取得
現在 立命館大学助教授
担当 第五章

貞光 威 (さだみつ・たけし)

1931年 生まれ
1976年 立命館大学大学院文学部研究科
修士課程修了
現在 岐阜教育大学教授
担当 第十章

『近代文学の知識人像』 目次

一 知識人と近代文学——総説

1 序	一
2 近代前夜	三
3 明治啓蒙期	五
4 自由民権期	七
5 明治二十年代	九
6 明治三十年代	一三
7 明治四十年代から大正へ	一八
8 むすび	二九

二 二葉亭・鷗外——近代知識人の原像

1 明治第二世代者の性格	三三
2 二葉亭の思想とその形成	三七
3 『浮雲』・文三の喪心の意味	四三
4 鷗外と津和野藩学	四六
5 『舞姫』・豊太郎にみる二面的相克	五〇

三 透谷と藤村——知識人の変貌

1 自由民権運動からの離脱	五五
2 想世界における考察	六〇
3 想世界の理想と挫折	六三

4	透谷から藤村へ……………	五
5	詩の世界……………	六
6	詩から散文へ……………	七

四 蘆花と尚江——近代市民精神と社会主義の接点

1	日本の近代化と蘆花・尚江における近代……………	七
2	向日的な知識人像とその成長の地盤……………	八
3	慎太郎の自立過程——蘆花の裏返しの自伝……………	八
4	維新の理想を完全開花させた仮構の近代……………	八
5	社会主義的知識人像——尚江の理想の投影……………	九
6	俊三の再生に至るまでの問題点……………	九
7	小作地の解放と田地共有組合の理想……………	九

五 荷風と白鳥——日露戦後の知識人

1	荷風文学と白鳥文学〈基音〉……………	一〇
2	時代への姿勢……………	一〇
3	「父」の問題……………	一〇
4	荷風・白鳥文学の基底……………	一一
5	日露戦後の知識人……………	一二

六 夏目漱石——鷗外にもふれつつその知識人群像の意味

- 1 積極的知識人の悲喜劇……………一三三
- 2 傍観的知識人の形成……………一三四
- 3 孤独な自我に生きる知識人……………一三九
- 4 古い知識人と新しい知識人……………一三三
- 5 近代知識人の行きつくところ……………一三五
- 6 近代の逆説的性格……………一三六

七 有島武郎——その人間把握と社会認識

- 1 恵まれた経歴……………一四二
- 2 科学的でヒューマンスティックな把握力——「カインの末裔」……………一四四
- 3 開かれた思想と社会組織への肉迫——「生れ出づる悩み」……………一五一
- 4 有島武郎と「白樺」派……………一五七

八 芥川龍之介——芸術と現実の相克

- 1 芥川龍之介の知識人的性格……………一六三
- 2 弱者への凝視——「芋粥」……………一六六
- 3 自己への凝視——「戯作三昧」……………一七〇
- 4 自己と現実への凝視——「河童」……………一七六

九 萩原朔太郎——詩の“現実”

1	想像力への断念……………	一八三
2	〈近代的自我〉の虚妄性……………	一八〇

十 斎藤茂吉——「鴨山考」に見る知識人としての性格

1	茂吉の生涯……………	二〇三
2	茂吉の柿本人麿研究……………	二〇八
3	「鴨山考」……………	二一八
4	湯抱鴨山……………	二三五
5	茂吉の人麿論の特質……………	二三七

あとがき

参考文献

人名索引・作品名索引

一 知識人と近代文学——総説

1 序 論

(1) 知識人とは

「知識人とは」と問うとき、一般に、知識・学問を身につけている人、あるいは教養のある人などと規定されるが、一方、近代の資本主義社会においては、知識階級に属する人、つまりインテリゲンチヤをさすという見方もできる。それは、階級構成のうえで、ブルジョアとプロレタリアとの中間に位置する人ということである。これは、ややクラシックな見解に属するかもしれないが、やはりまったく無視することもできないであろう。

しかし、日本近代の文学とのかかわりを念頭においてみると、この階級構成よりする見解はいささか粗雑なものとなるようである。つまり、近代初頭の知識人や、開化期に時代のオピニオンとして活躍した啓蒙家を重視する場合、その規定は適用しがたいのではないか。そこで、むしろ、はじめに述べた、広く学問・知識を身につけた人と規定すべきではないかと思う。

しかしまた、その学問・知識を身につけた人が、すべて文学にかかわりをもつかという点必ずしもそうは言えない。おおよそ、この意味での知識人は、大きくわけて、知的労働者と知的創造者の二者とすることができよう。知的労働者というのは、官吏、技術者、教員、会社の上級社員などである。実務的知識人といってよいだろう。知的

創造者というのは、学者、芸術家、文学者、ジャーナリスト、革命家などと考えてよい。創造的知識人ともいうべき人たちである。もっとも、実務的知識人のうち、その職業のいかんにかかわらず、知的な面で、創造的活動を志し、実践している人々は創造的知識人に加えてよいであろう。

右の実務的知識人の方は、文学の創作には直接関係をもたないと考えられる。文学に直接かわるのは、後者の創造的知識人だと言えよう。この人たちは、知的・精神的な活動をもって、時代・社会の現状を凝視し、それを批判し、欠陥を発見し、よりよい状況を作り出そうとする。この種の活動が、文学の形態をもって表現に移されるとき、知識人が直接、文学にかかわる場合だと言えるのである。

(2) 文学と知識人

創造的知識人が、文学（小説）的表現を行なうとき、その知識人性が文学とかかわるのに、二つの場合があることが想定される。

一つは、作者がその知的・創造的な問題意識のままに、構想をたて、人物を形象し、そこにテーマを盛りあげていく。そのテーマに、作者の問題意識が結集され、その知識人性がおのずから表出される場合である。つまり、テーマの知識人的性格である。

もう一つは、作品中に、登場してくる人物のなかの知識人像である。作品には、様々な人物が登場してくるであろう。創造的知識人も、あるいは実務的知識人も、あるいは実務的から創造的に移る者もあるであろう。このような登場人物の人間像としての、知識人的性格を考えるのも意味のあることとなる。

この作中人物としての知識人は、言うまでもなく作者の創造した人物であり、作者の知識人性の凝集し、その仮託されたものである。したがって、そこには、作者の肯定する知識人は言うまでもなく、その否定する人物も描

き出される。その場合、肯定する知識人は作者と同質あるいはその分身となることが想定される。反対に、否定的な人物は、作者と反対の人物となることが想定される。そこで、その人物像は、先の一つの場合の、作者の知識人としての、創造的な意識の形象されたものであり、ただちに、その作品のテーマと密着したものとなるであろう。いわば、登場人物の知識人像はテーマの表現のための、きわめて重要なモチーフとなっているのである。このように、作中の知識人像と作品のテーマとは、密着し一体化したものと見なければならぬ。

このように、テーマと人物との関係は分離しがたい関係にあるが、作品のなかには、人物中に、まったく知識人が登場しないものがある。しかも、知識人の創造的活動が旺盛に語られるという場合があるのである。そこで、論述の便宜上、作者の問題意識すなわち創造的知識人としての性格や機能に文学とのかかわりを見るとともに、また、作中の知識人像に焦点を合わせて考察することともなろう。

2 近代前夜

近代の問題を考える前に、近代をもたらずのに何らかの力があつた近世末期の知識人の場合も瞥見しておかねばならないであろう。

近世中期から幕末へかけて、安藤昌益（元禄16―宝暦12）、富永仲基（正徳5―延享3）、杉田玄白（享保18―文化14）、山片蟠桃（寛延元―文政4）、海保青陵（宝暦5―文化14）、渡辺崋山（寛政5―天保12）、高野長英（享和2―嘉永3）などの革新的な思想をもった学者たちがあつたが、政治・経済・社会・科学などの面の著作をものしたので、直接、今日言うところの文学に類する作品を著わすことはなかった。

一方、文学にほど近い国学者・漢学者の場合ほどのようであつたか。本居宣長（享保15―享和元）は文学的表現を

和歌に求め、それを政治に役立てたり、身を助けたりするものではなく、ただ心に思うことを述べるものだとし、当時の教学からの解放、すなわち文学の自律性を認めはしたが、それをもって、自己の革新的思想の表現を行なうことはなかった。この立場は、彼の歌道を継いだ城戸千楯（安永7―弘化2）においても同様であった。また、儒者の方では、荻生徂徠（寛文6―享保13）の個人尊重の精神を継いだ服部南郭（天和3―宝暦9）も文学の自律性を説いたが、政治や社会からは遊離していた。もっとも詩文における純文学の発生をもたらしはしたが、知識人性をその内容とするには至らなかったのである。

戯作者に数えられる知識人としては、まず平賀源内（享保3―安永8）があげられよう。彼は、高松藩の下級武士の家に生まれ、長崎に留学して蘭学を知るに及んで、従来の儒学中心の教学に疑問を抱き、江戸に出て様々な学問を身につけた。なかでも本草学（博物学）がその中心となり、温度計、耐火布、エレキテルなど科学的な発明をしたり、洋画の摂取なども試みるころがあった。彼の文学作品としては、風来山人の号で著された『根南志具佐』（宝暦13―明和5）、『風流志道軒伝』（宝暦13）が著名であるが、これらは当時の時世を諷刺したものであった。彼は、封建的モラルに追隨できぬ鬱屈した精神を、このような作品に噴出させたのであるが、作品自体は真摯な問題提起とはほど遠い滑稽猥雑なものであった。所詮は、厳しい封建倫理の規制のもとに、韜晦するほかなき体のものとなったのであり、近代に受けつがれるものではなかった。

これらを見ると、近世後期の知識人の、文学とのかかわりは、直接には、自己の問題意識を作品化せず、現実逃避的な姿勢で詩文を作るか、ネガチブな形で滑稽猥雑に韜晦するものであった。

その点、幕末の著名な知識人として歴史上に名をとどめてはいないが、果敢にその問題意識や批判精神を表出した人に、寺門靜軒（寛政8―明治元）がいる。彼は仕官運動をしたが容れられず浪人生活を送るうち、『江戸繁昌記』（天保3―7）を著した。それは、封建的な身分秩序のもつ矛盾をとりあげ、また儒者の無気力と頹廃を罵倒したも

のであった。これによって静軒は出版さしよめの処分を受けたが、よく売れるため、ひそかに版を重ね、さらに巻を書き継いだため、天保改革に際して江戸払いの刑を受け、諸国を放浪するに至った。これは、まさに江戸末期における知識人の敗北の一樣相であるが、作品中に自嘲のパロディが認められるものの、小説形態ではないので、主人公の敗北などという近代的なケースをそこに見ることはできない。自嘲としては、作者自身を、みずから「無用の人」と称する自己否定の形をとった自己肯定が見られ、そこに一脈の近代性をうかがうことができる。この「無用者」としての自覚は明治初頭の成島柳北に受けつがれるのである。

3 明治啓蒙期

啓蒙期とは、この場合、維新後、明治十年前後の自由民権運動の発足と、西南の役などにおける反動士族の敗北の時期までとする。

この啓蒙期の知識人は、すでに幕末に、幕府の蕃書調所や開成所などで仕事をして新知識を蓄えつつあったが、まだ積極的な活動の方途をもってはいなかった。それが、明治政府の成立により、政府から文明開化の路線が示されるとともに、国民啓蒙の仕事にとり組むことになった。

その啓蒙家の結集したのが「明六社」であった。それは『明六雑誌』（明7・3・8・11）を機関誌とした。はじめのメンバーは、呼びかけ人森有礼ありのりのほか、西村茂樹、津田真道まみち、西周あまね、中村正直ただし、加藤弘之ひろゆき、箕作秋坪あきへい、福沢諭吉、杉亨二きょうじ、箕作麟祥りんしょうの十名であった。彼らは明治政府の文明開化政策を基本的に承認し、それを支える自主自立の国民を育成しようとした。そのため、儒教を中心とする封建教学をしりぞけ、また旧来の国民の卑屈の氣風をためなおそうとした。

ところが、右の十名のうち、箕作秋坪、福沢諭吉を除いて、すべてが政府の官僚であった。福沢は、知識人は、官とも民とも異なる独自性をもたねばならないと言って、こと政治に関した場合、政府を弁護するかしないかという意見の対立を生じるので、国民の啓蒙は、野にある知識人が自由に行なわねばならないとした。この福沢の予見は適中して、「民撰議院設立建白」が出て国民の政治参与の問題が生じると、意見の対立をきたし、やがて「明六社」は解散することになった。この事態は、官と野との知識人の分裂を意味するものであるし、ここで、官にあるものは官僚としての性格のままに政府の施策に従い、本来の知識人の性格である批判性を失うに至った。

ところで、この「明六社」の人々の文学への関心はどのようなものであったか。それは一言にいつて無関係であったと言ってよい。もしあったとするならば、文学の形態を、その啓蒙の具に供するにとどまった。その代表的なものは福沢諭吉（天保5→明34）の寓話「かたわ娘」（明5）である。彼らは、彼ら自身の表現というものをもたなかった。彼らは、その学問・知識を備えた者の希少価値を買われて、幕臣から明治政府の官僚へ横すべりをした人であった。維新という大きな時代の変革にあたって、その動向に対する闘いや、転向の苦悩や、またそこに生じる自己否定の体験をもつ人々ではなかった。野にあった福沢といえども、その慶応義塾の指導者の地位は、決して自己否定を伴うものではなかった。彼らは十全なる自己肯定のもとに、無傷の知識人として、時代の上層に位していた。彼らはみずからの内面を表現する必要をもたなかった。彼らの胸中は、文学にとってはまったく不毛の大地であったのである。

啓蒙家の朝と野とへの分裂は、ジャーナリストの成長をもたらしした。端的に言って新聞・雑誌の興隆である。

『郵便報知』（栗本鋤雲、藤田茂吉）、『朝野』（成島柳北、末広鉄腸）、『東京日日』（岸田吟香、福地桜痴）、『東京横浜毎日』（沼間守一、島田三郎）、『東京経済雑誌』（田口鼎軒）などが主なるものである。これらのジャーナリストは、いずれも幕臣あるいは藩士または儒者であった。このなかで、比較的明治政府に好意的であった岸田吟香・

福地桜痴をのぞいて、すべて反政府の立場にたった。そのころはまた、明治政府の反動性が強まった時期でもあったのである。

これらの新知識人であるジャーナリストの心底も、旧武士の意地や志士的な情熱に満たされていて、みずからを表現することはなかったが、これらのなかで、成島柳北（天保8―明17）は、旧幕府の高官として薩長閥に屈することをいさぎよしとせず、みずからを「無用者」と規定するに至っている。彼の表現は、先述の寺門静軒の『江戸繁昌記』にならった『柳橋新誌』二編（明7）となってあらわれた。それは、柳橋という花柳の巷に取材してはいるが、そのなかに、明治政府への熾烈な批判を蔵している。

なお、この時期の顕著な現象として、創造的知識人ならぬ実務的知識人の発生を見ておくことは重要である。つまり、官員万能の風潮に乗って、旧武士の官員志望が激増したことである。彼らは、コネを頼り、賄賂を使って、頭を下げみずからを売るに至った。彼らは、旧武士の意地も知識人としての誇りも使命感も喪失した、ぐうだらな職業的知識人、すなわち実務的知識人となったのである。彼らは、いわゆる立身出世主義のエゴイズムに毒されるときともに、やがて本来的な知識人である創造的知識人の敵として立ち現われることとなる。

4 自由民権期

自由民権運動も、創造的知識人の運動としてはじめられた。反明治政府の立場にたった元参議、板垣退助、後藤象二郎、江藤新平、あるいは副島種臣らが、「民撰議院設立建白」（明7・1）を提出することによってその運動の火ぶたは切られた。これら士族の運動に加えて、やがて、地方豪農層の戦線参加が見られ、その間に、民権思想家として植木枝盛（安政3―明25）や、中江兆民（弘化4―明34）の活動が見られた。またその理論的指導のもとに、

新知識人たる政治青年が生まれた。

これらの自由民権運動の対象たる国民大衆への啓蒙は、開化期の啓蒙となら異なるところのない困難な状態であった。彼らはともに手を携えて進まねばならぬ国民を、愚民頑民と罵倒せねばならない焦燥にかられた。文学は依然として啓蒙の具でしかなかった。それは、人情本的寓話、戸田欣堂の『情海波瀾』(明13)や桜田百衛の『自由邂逅錦袍』(明16)となり、また、西欧の民権家の事蹟を翻案した島田三郎、萩原乙彦らの『通俗民権百家伝』(明11)や、矢野竜溪の『経国美談』(明16→17)となって現われた。また、自由民権運動に内在していた国権拡張、民族独立の意識をもって、東海散士の『佳人之奇遇』(明18→30)が書かれたりした。『佳人之奇遇』は、作者東海散士自身が登場してきて悲憤慷慨の情を述べる点、作者の知識人性が、みずからの内面を打出しているようであるが、これは個人のそれとはまだ言い得ず、啓蒙家運動家一般の声にすぎない。この声が、真実、政治家一個の声として聞かれるのは、末広鉄腸(嘉永2→明29)の『雪中梅』(明19)『花間鶯』(明20→21)においてである。彼は、政治と小説とどちらがむつかしいかという問題をみずから設定して、小説が架空の虚妄に陥ることを戒めるとともに、みずからの政治運動の行方を探究している。ここに、日本当代の政治家——創造的知識人が、自己の理想に向っての運動を、そのまま文学の場と重ね合わせようとする真剣な表情を読みとることができる。それは、知識人みずからの主体的な活動によって生み出された作品であり、日本近代文学の第一歩を印したものと見ることができる。もっとも、作品としては、人物の類型性、結構の偶然の過多など前近代的な要素を内包しているため、近代文学の第一作とすることはできないが、その創作主体が、政治家としての啓蒙意識あるいは政党の政策を超えて、作者個人の課題にもとづいている点に、その近代性は認められねばならない。

これらの、政治小説の明るい未来、幸福な大団円の作品群にまじって、直接政治を取り上げないで、青年の立身とその過程の苦難を描いた菊亭香水(安政2→昭17)の『惨風悲雨世路日記』(明17)が書かれた。これも、作者が